

# 芥川だより

発行日 \* 2022年3月1日 e-mail: ab\_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸  
発行人 下村嘉明  
〒661-0951  
尼崎市田能5-3-10-601  
☎090-8796-8624

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*

## プーチンは未来への希望を壊した



ロシアのウクライナ侵攻が世界の人々に与えた衝撃は計り知れない。私たちがこれまで営々と積み上げてきたものが一瞬で壊れてしまったように思える。私には、壊れてしまったものが未来に対する希望のように思えるのだ。私は、この希望の過失感の裏に潜むとてつもなく大きく深く底知れない人間が持つ欲の恐ろしさがより鮮明に浮かび上がってきたように思える。

ウクライナ情勢を何度聞いても、私はロシアがウクライナ侵攻をするとは考えていなかった。よもや、そんなバカな事をプーチンがするとは想像さえしなかった。

私の想像力の無さなのだが、核戦争につながりかねない世界大戦になるかもしれないウクライナ侵攻を賢そうに見えたプーチンが自らの判断で実行するとは全くの予想できなかった。

米中ばかりが世界の注目を浴びてロシアは後退した感じは確かにあるが、子供じゃないからひがみや劣等感からやけっぱちでやったわけでもないだろう。世界は米中だけではない、ロシアもいる事を世界の人々に知らせたかったのか。えらく幼稚な発想だが、まぎれもなくプーチンが考えたことだから、プーチンが幼稚な人間だったという事だろう。

子どものケンカなら笑ってすませるかもしれないが、かりにもロシアで長期にわたり政権の座にあるプーチンが戦争を仕掛けたのだから、きわめて深刻な状況だ。核戦争の危険もさることながら、私のように人間に対する大きな希望を失ったと感じる人々が多く生まれたことが人間の未来により大きな不安を作ってしまった。今後の展開は分からないが、人間不信が世界中に拡散することが大きな意味を持つと考える。いかに人間に対する信頼感がもろくて信用できないものか。人間の抱く欲望が狂うと、いとも簡単に他人を殺し、国家をも侵略させるものか。絶望的な人間の行いは、今後とも果てしなく続いていくのかと考えると暗澹たる気分になってしまうのは私だけだろう

## 死をめぐるあれやこれ (88)

山の生活

石川 吾郎

世界は戦争の時代に突入してしまったようだが、毎日このニュースで暗い気持ちになるので、この話題にはふれない。◆最近 YouTube の動画がとみに豊富になっている。私のお気に入りには、中国四川州の若い女性が山里で祖母と二人、半自給自足の生活をする姿を、取り巻く美しい四季の移り変わりとともに映したものだ。◆内容の半分以上は料理（むろんみんな中華料理）を作る過程を手際よく追っているが、素晴らしいのは食材の調達から丹念に描いていること。野菜の種を蒔くとき、その苗が成長して収穫するところまで、美しい山の自然の姿ともに映し出す。また木の実やキノコの採集などから、庭に放し飼いにした鶏を締めるところまで含んでいる。時とともにその庭が花にあふれて、しかもそれがすべて食材にされるのにも感心される。◆この動画は中国で大変な人気となり一千六百万以上の登録者となった。彼女も中国ではすっかり有名人になったようだ。だが最近残念なことに、彼女が富裕層セレブリティになってしまったからか、更新がすっかり減ってしまっている・・・。

なおこの動画は YouTube で「Liziqi」と検索をすればすぐに見ることができる。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 88	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 96	坂本一光	2
哲学叢いの時事放談 46	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 52	下村嘉明	5
新型コロナウィルス愚考(23)	明石幸次郎	6
オクラの山たより 66	因了生	8
隠された歴史 41	満田正賢	12
マルクスから学ぶ(13)	成瀬和之	14
俳句	土田裕	16
	影山武司	16
編集後記	S K生	16
ふみの道草 45	山椒魚	17

素老人☆よもだ帳 (96)

坂本一光

◆美しい国の言葉に老老の  
枕詞が一つ加わり

二〇一〇年、妻の後を追うように仕事を辞め妻の故郷に移住、九十五歳の義母と同居することになった。その十三年前に義父を送ってから少しづつ進行してい

た義母の認知症は、誰の目にも明らかになっていたが、それでもまだ夢と現を行き来しているようであった。樋口了一の「手紙」という歌を聞いたのはその頃だと思ふ。

手紙〜親愛なる子供たちへ

原作詞…不詳、日本語訳詩…角 智 織

日本語補足詞…樋口了一  
作曲…樋口了一、編曲…樋口了一  
ストリングス・アレンジ…本田優一郎

年老いた私がある日今までの私と違っていたとしても

どうかそのままの私のことを理解して欲しい

私が服の上に食べ物をこぼしても靴ひもを結び忘れても

あなたに色んなことを教えたように見守って欲しい

あなたと話す時同じ話を何度も何度も繰り返しても

その結末をどうかささげらずにうなずいて欲しい

あなたにせがまれて繰り返して読んだ絵本のあたたかな結末は

いつも同じでも私の心を平和にしてくれ

た

悲しい事ではないんだ 消え去ってゆくように見える私の心へと 励ましのまなざしを向けて欲しい

楽しいひと時に私が思わず下着を濡らしてしまったり

お風呂に入るのをいやがるときには思い出して欲しい

あなたを追い回し何度も着替えさせたり

様々な理由をつけて

いやがるあなたとお風呂に入った懐かしい日のことを

悲しい事ではないんだ 旅立ちの前の準備をしている私に 祝福の祈りを捧げて欲しい

いずれ歯も弱り飲み込む事さえ出来なくなるかも知れない

足も萎えて立ち上がる事すら出来なくなつたなら

あなたが弱い足で立ち上がるうと私に助けを求めたように

よろめく私にどうかあなたの手を握らせて欲しい

私の姿を見て悲しんだり自分が無力だと

思わないで欲しい  
あなたを抱きしめる力がないのを知るのはつらい事だけど

私を理解して支えてくれる心だけを持つていて欲しい

きつとそれだけでそれだけで私には勇気がわいてくるのです

あなたの人生の始まりに私がしっかりと付き添ったように

私の人生の終わりに少しだけ付き添って欲しい

あなたが生まれてくれたことで私が受けた多くの喜びと

あなたに対する変らぬ愛をもって笑顔で答えたい

私の子供たちへ

愛する子供たちへ

この詩に付け加えることは何もないのだが、義母はそれから百二歳まで生きて逝った。生きることの大切な基本は物質エネルギー代謝、すなわち、食べることと排泄すること、そしてたとえ脇を支えられながらも自分の足で歩くことだと知った。

老老介護が終わった頃から、もう一つの介護の実態を知らせるニュースが流れ

るようになった。

美しい国の言葉に片仮名の

ヤングケアラ一つま増え

これもまた、美しい国の現実であった。

素老人が大学で働いていた頃、医者之余剰人員を減らすため（本当だろうか）

医学部の学生定員を削減する方向に国立大学は自ら舵を切っていた。それは言うまでもなく国の強制的な指図ではなく、

大学の自主規制改革ということになるのであるが。国がすることはいつもそうで、

高齢化社会では介護や看護職は不足することによって削減した定員を使って（実質的には学生及び教員の定員増をして）看護学科等が新設された。介護職を養成する

の官民の専門学校が新設ラッシュを迎えたのもその頃であつたらうか。それは必要なことであつたのだろうが、しかしその一方で、大学を去る頃には、この少子化の国で、あの町この島では出産も出来ない事態が進行していた。

昨今の新型コロナパンデミックの悲劇も、少なくとも日本では、何から何まで無策（無能）なまつりごとのなれの果てにしか見えないのは素老人だけであろうか。

種まいておいてしっかりていねいに

出来もしないそんな「よもだ」が、よく

言えたものである。

（かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人

## 「哲学爺い」の時事放談（46）

祖蔵 哲

### 戦争の哲学

先月2月の話題は依然として新型コロナ第6波の状況推移と2日に開幕した北京冬季オリンピックであった。しかし、

その後、国際情勢は一転、20日のオリンピックの閉幕を待っていたかのように24日、ロシアがウクライナに侵攻した。

世界中のどこかで今も紛争や内戦は起きている。いずれも歴史的経緯を持ち民族問題を原因とするものが多い。いわゆる

近代「国民国家」という制度的枠組みの中に入り切れない「民族」という抽象概念が、イデオロギー化されて爆破を起すのである。その意味では「国家」も「民族」も実体ではなく想像上での「共同幻想」である。「民族」と同じような概念に

「人種」がある。人類という「類概念」のカテゴリーにある「種概念」があなたも実体であるかのように機能している。

肌の色や、言語、外見などの「形相」が「本質（人間）」と区別され、別物として存在しているかのようなものである。

ロシアがウクライナに軍事侵攻し、ウクライナが軍事抵抗している。これは戦争状態を意味している。この軍事という力による対立、つまり「戦争」とは何か。この自明のようでありながら、依然として無くならない「悪」、「戦争」について今号は哲学してみる。

### （1）戦争とは何か

戦争とは暴力を伴う闘争であり、征服や国防などの政治的な目的を達成する

「手段」である。財産や人命を失わせることによって物理的、精神的な優越的「力」

を示し、政治共同体間での問題を強制的に解決する。その倫理的な特徴として、戦争では勝利という目標のために暴力・殺人・破壊など平和において非道徳・犯罪とされる「悪」が公認されることが挙げられる。「戦争論」で有名なプロイセン

の19世紀の軍事学者クラウゼヴィッツは「戦争はそれ以外の手段を以ってする政治の延長である」と論じている。

### （2）哲学者と戦争

古代ギリシア、ソクラテス以前のイオニアの自然哲学者であったヘラクレイトスは戦争が万物の父であり、万物の王で

あることを述べている。それはあらゆるものが流転するという唯物論自然観に基づいた戦争観であり、戦争も自然の一部という決定論的世界観である。しかしその後、歴史家トゥキディデスによってペロポネソス戦争の惨事が叙述され、劇作家のエウリピデスやアリストフアネスが平和主義的な思想を展開した。アテナイの哲学者プラトンは『国家』の中で戦争の原因として人間の欲望と国家の成り立ちとの関係を考察している。人間の欲望は拡大し続ける性質を持つために、従来の自給自足の状態を離脱して他国との関係が発生し、最終的には利害の衝突によって戦争が勃発すると考えた。

その後、ギリシア世界はアレクサンドロス大王によってオリエン文化と融合しヘレニズム文化を形成した。そこでは世界は一つという世界国家（コスモポリタン）の市民としての価値観からストア学派が現れた。キプロスの哲学者ゼノンにより確立されたストア学派は自然の法則と合致するように人間の理性をはたらかせる禁欲主義の倫理を提唱し、理性によって全ての人間を平等に同胞とする世界市民主義と自然法の着想を展開した。

ここまで見てきた通り、紀元前のこの段階で、「戦争」が自然の一部であり、人間も自然物である以上避けることができない必然的なものであるという「決定論」のものから、いや人間の「理性」はそれを避けることができるし、全世界に適応

される倫理によって可能であるという思想が形成されている。

しかし、西欧がキリスト教世界に入るとこの考えは一変する。いわゆる「聖戦論」の出現である。「聖戦」といえばイスラム教のジハードを連想するが、キリスト教も「十字軍」という「聖戦軍隊」を組織していた。「聖戦」とは教義を守るための戦争は神によって正当化されると理屈である。これは逆に戦争は正当な権利のため以外に戦ってはならないことを定式化した。現代の政治哲学、法哲学にまで及ぶ影響を与えて国際平和のため以外に戦うことを禁じる国際連合の設立へと反映されていく。

17世紀になりイギリスで市民革命が起きると「個人」という近代的人間意識が成立する。中世世界の宗教的共同体から「個」という単位の集合としての共同体意識の芽生えである。イギリスの哲学者トマス・ホブズは共通の権力が確立される以前の人間本性と自然状態について理論的に考察し、そのような自然状態を万人の万人に対する「戦争」であると論じた。逆の見解としてジョン・ロックはホブズのな戦争観ではなく、戦争を自然状態ではなく権利を伴わない武力が行使される時に生じる事態だと見なす。そしてルソーは「一般意思」によりヨーロッパを単一の権威の下に統一することによって安定化を図ることを望んだ。

このような平和主義の構想はイマヌエ

ル・カントの『永遠平和のために』で体系化されることになった。この書でカントは〈常備軍〉は、時が経つとともに全廃されるべきであると言っている。というのは、常備軍は、いつでも戦争を始めることができるといふ準備態勢によって、他の国々を絶えず戦争の脅威で脅かす。また、常備軍の存在は、互いに軍事力で優位に立とうとする国家間の野心を刺激し、果てしのない軍備拡張をうながす。

その結果、増大する軍事費のため、平和の方が短期の戦争よりもいっそう重荷となるという逆説的事態が引き起こすと言ふ。そうになると、この重荷を解き放つために常備軍そのものが、「先制攻撃」「侵略戦争」の原因となる。このような論理で、「常備軍の撤廃」が主張されている。全くその通りで現代でもすべて当てはまる。戦争の裏で莫大な利益を得ているのは軍事産業である。

しかし、カントは最後の観念論哲学者であった。観念論とは空想という意味ではなく、イデアリズム、つまり理念、理想主義の哲学のことである。崇高な理念を掲げてその達成を自らの義務と化して自律的に実行する。それが観念論哲学の真の認識論的方法である。

フランス革命とナポレオン戦争を経験したドイツの哲学者ヘーゲルは戦争の概念を歴史哲学のうちに位置づける研究を進めた。彼にとって戦争とは二つの原初的な力が衝突している事態であり、これ

は国民国家を手段とし歴史のうちに置いて観念が具体化しようとする過程として正当化されていた。されにヘーゲルは「国家」が「精神」によって弁証法的に統一されるといふ哲学を展開し、「精神」の現れが「民族」であるというようになつていった。

ヘーゲル以後、哲学は戦争を語る事が少なくなつた。まさしくヘーゲルのいう「歴史の終わり」である。ヨーロッパは1618年からの三十年戦争を経て「国民国家」といふ実利の共同体に分割され、その統一理念は以前の普遍的宗教ではなく、「主権国家」といふ、個々の「意志」を国家に集中するという体制を採用した。歴史上初の国際協定、ウェストフリア条約である。その場合の統一理念、その多くは「民族」を基本に置くと思われたが現実にはそれ通りに国家区分されなかつた。そして哲学において「民族」は「ナショナルリズム」として語られるようになる。そしてマルクスの時代、哲学はイデオロギーとして変貌する。それ以後の哲学は専門化され個々個別の問題に集中するようになる。近年の哲学は「戦争」を語ることはない。

### (3) 『ひとはなぜ戦争をするのか』

20世紀は「戦争の世紀」と言われている。第二次世界大戦開始の危機が迫る中、国際連盟は物理学者アインシュタイン

に「戦争について語る」というテーマを依頼した。そして彼は心理学者の不フロイトを対談相手に選んだ。

戦争がなくならないのは、そもそも人間には破壊的な「本能」をもっているからで、そしてその欲求自体をコントロールするには外部の「大きな力」が必要ではないのか。とアインシュタインは問う。国際連盟というのは第一次大戦を経て、世界は二度と戦争を繰り返さないためにという組織であつた。世界規模でのルールを作つてきちんと守ろうというシンプルな考え方である。しかし、アインシュタインが言うように「権利」を保護するルールや「法」など人間が作り上げたものは無力なもので欲望（暴力）は抑えられないのではないかという疑問である。フロイトはまず「権利と権力」の関係から議論をはじめた。そこでは「権利」を「暴力」と呼び変える。フロイト曰く、権利（法）と暴力、この二つは正反対のもの、対立するものと見なしている、けれども、権利と暴力は密接に結びついていると。

原始の時代、人と人のあいだの利害の対立は基本的に肉体の力、暴力によって解決されていた。しかし、武器が登場したとき、すぐれた頭脳や才知がむき出しの腕力を凌駕しはじめる。この変化は身体的な暴力による支配から「法」による支配へ変わっていく。つまり、本来、権利を保護するための法が支配を強制する

「権力」の道具となっていることを指摘している。支配の強制は「暴力」と同じであり、そこでは「欲望」が「理性」と同居している。

戦争を確実に防ごうと思えば、皆が一致団結して強大な中央集権的な権力を作り上げ、何か利害の対立が起きたときにはこの権力に裁定を委ねるべきである。それしか道がないとフロイトは語る。

ここでの論点はアインシュタインの「人間は本能的に暴力的である」という確認的質問に対して、フロイトがそれは本能ではなく「理性的」なものであると指摘している点である。

フロイトの「精神分析理論」での人格構成の三つの要素、「イド・自我・超自我」を確認しておこう。「イド（それ）」は人間の本能的欲求であり、これに対して「自我（エゴ）」は理性的判断。そして、「超自我（スーパーエゴ）」はそれらを外的に制約する規範や倫理的自覚である。

そしてフロイトは言う。国家が暴力（イド）であれば、それをコントロールするのは「自我」（権力）でなく超自我である「権力」でなければならない。つまり、戦争を起すような国家は倫理的に制裁をうけるべきであると言っているのだ。

確かに、現在ロシアの戦争指導者は「イド」と「自我」の葛藤状態にある。早く自己の内なる「超自我」に目覚めなければ精神分裂はさらに進行するであろう。

#### (4) 暴力とは何か

先に、戦争は「暴力」であると定義した。そこでさらに「暴力と何か」を問う。

暴力とは、他者の身体や財産などに対する物理的な破壊力という。ただし、近年は精神的暴力も暴力と認知されるようになりつつある。

人間の身体は現実の世界に具体的にはたつきかける能力があり、この能力が他者の意志に対して強制的にくわえられると暴力となる。暴力は他者に対する危害をひきおこすことができる顕在的な力である。また、潜在的機能として、強制力、抑止力、抵抗などを持つ。

ホッブズが提唱した「万人の万人に対する闘争」を避けるために国家が暴力を行使する権利を独占するのはその機能からである。

しかし、一方では暴力は人間の尊厳や人権をおびやかすものであり、対立は非暴力的な手段によって、対話などによって、理性的に解決されるべきだ、という社会的規範も生まれている。しかし現実には理性的対話だけでは不十分として、世界的には自己防衛のための合法的暴力や、犯罪者予備軍に対する見せしめとして設けられる死刑制度など象徴としての暴力を法制度として許容している国家が存在している。これらは、「暴力による暴

力の抑止効果」を期待している。また、暴力的権威により、家庭内暴力、地域暴力など抑止しようという思想も依然として残っている。

暴力をいかに対処するか。それは戦争をいかに回避するかの問題でもある。しかし、現在起きているウクライナ侵攻はすでに戦闘が開始されているのである。

停戦交渉は継続されているもののそれは降伏条件の協議であるから、戦争の一部である。このような状況の中やはり戦争をやめさせるためには戦力で対応するしかないという考えは依然として残る。「暴力には暴力を」である。これでは戦闘がエスカレートして犠牲者は増えるばかりである。しかし、抵抗する側もやはり国家、民族の存亡という「ナショナリズム」を掲げ暴力を行使する。また、一方世界も経済制裁という非常事態ルール、つまり「暴力的強制」によって戦争を停止させようとしている。

世界は「非暴力」から遠くなっているように感じる。しかし、「非暴力」は本当に無力なのか。そして「平和」とは暴力がない状態「非暴力」のことか。次号はこの「暴力」を哲学する。だが、いずれせよこの戦争が一刻も早く終わることを望む。世界はまだこの愚かな戦争をなくせない原因を真剣に哲学するべきであると思う。

#### 大峯奥駈道 (52)

下村 嘉明

#### 体験型人間学 2

年の暮れに、戸建て住宅の警備に行った。連絡の住所をスマホで検索し行っただが、誰もいないし連れの警備員も来ない。おかしいと思い警備員の松岡さんに連絡をすると、近くの別の物件の場所にいるが、どうも違うみたいだから、私の方へ来ると言う。しばらくして松岡さんは来られた。約束の時間になっても工事関係者は誰も来ない。

家の基礎は出来ているから、木材を運び込んで組み立てれば出来る状態だ。普通は警備の必要が無いようなところなのだが、資材搬入をする家の前の道が一方通行で通行止めの表示が難しく、車や人が来ればうまく誘導する為に私たちを二日間雇ったようだ。

仕事としては、さほど難しい仕事ではないが、誰も来ないと不安になる。松岡さんとコンクリートの基礎に腰掛けて待つことにした。9時過ぎに監督が軽トラで来て、資材が遅れていて搬入が昼過ぎになるから、それまでは楽に休んでいて欲しい、と言ってすぐに別の現場へ行った。何件も現場をかけ持ちをしているのだ。

松岡さんと二人でよもやま話を始めて

みると、松岡さんはおもろい人生を生き  
て来られた人だった。松岡さんは、四国・  
徳島の生まれ、5人兄弟の末っ子。中学  
を終えると家を飛び出し、兄を頼って京  
都にきた。兄は京都の新幹線駅を作るた  
めのとび職をしていたので頼み込んで一  
緒に働くようになった。当時は、足場を  
丸太の木で組んでいたもので、どんなに高  
くても丸太の上を、丸太を担いで歩いて  
いたそうで、一度も落ちたことはないが、  
一度だけ5メートルほどの高さから飛び  
降りたという。

安全ベルトもなくして落ちれば即死のよ  
うな空中で仕事をし続けた。ある時、関  
西のスーパージェネコンからスカウトされ  
年俸800万余りで10年間働いたとい  
う。関西の鉄骨の大きな建物は、大方自  
分が関わってきたという。100人ほど  
の鷹を使いながら仕事をしてきたらしい。  
松岡さんは、小柄でとび職に向いてい  
そうな体つきである。鷹に向くような奴  
は、相当の強い奴でないとダメだとい  
う。松岡さんは、仕事が終わると、人の  
倍ほど飲み食いたそうだ。ずいぶん無  
理をしてこられたに違いない。

晩年、心臓を患い三分の一しか正常に  
動いていないとかで、朝は特につらいそ  
うで、手を触つても冷たい。幾度も救急  
で兵庫医科大に緊急入院したそうである。  
自宅が病院から近い所にあるから、歩い  
て言った時に、医師から近くても救急車  
を呼んで来てください。その間に救急隊

員からの情報も入って来るし、病院でも  
治療の準備が出来るから、必ず救急車で  
いくようになったという。松岡さんによ  
ると有名な心臓外科の先生がおられるみ  
たいである。本人曰く、たぶん今年中  
には死ぬと思う。だから、今住んでる家  
賃12万のマンションから半額程度のマ  
ンションに移りたいんだが…。なかなか  
思うようにはいかないらしい。

人なつつこそうに見える74歳の老人  
は、致命的な心臓の病に侵されながらも  
毎日仕事をしている。

話は飛ぶが、ある時に一緒になった木  
下さんは、もつと驚異的だった。50歳  
ぐらいに見える彼は、元気そうな小太り  
の大きな男だ。見たところ普通の人間に  
見える。ところが、彼の病歴を聞くと唾  
然とする。まず初めは心臓病である。あ  
る朝、苦しくなつて、これはやばいと思  
い救急車をやつとの思いで呼んだ。心臓  
が止まりかけているので、近くの病院に  
運び込まれ心臓外科の先生が急遽手術を  
してくれたのだが、胸を開腹し血管チュ  
ーブを差し込んだ状態で、執刀医は「俺  
には、この手術は無理だ。中央病院に頼  
もう」といいだして電話すると、帰宅の  
用意をしていた医師は「よし、やつたる  
から、連れてこい」と返事をもらい手術  
途中のままで救急車を走らせて、手術が  
再開した。17時間に及ぶむずかしい手  
術だったらしい。

奇跡的に回復した彼は、その後も脳梗

塞にかかったが素早く病院に運び込まれ  
手術を受け短期間のリハビリで後遺症も  
なく働いている。彼は「心臓は止まっ  
てもすぐには死なない。マッサージをすれ  
ば、また動く。もう俺の心臓は人工心臓  
とバイパスになってしまったから安心  
や。」

運の良しあしは確かにあるんやと感じ  
た。

## 新型コロナウイルス禍愚考(その23)

明石 幸次郎

加藤諦三さん(心理学者、早稲田大学  
名誉教授、84歳)はニッポン放送で「テ  
レフォン人生相談」というラジオ番組の  
回答者・パーソナリティを半世紀以上続  
けています。50年前の相談と最近の相  
談は違いますか?と問われたが「かかっ  
てくる電話の悩みは、本質的に半世紀の  
間、変わっていません」と言われていま  
す。

又、加藤さんは半世紀というより、人  
間の悩みは旧約聖書以来、いえ、ギリシ  
ヤ神話の時代から今現在まで少しも変つ  
ていないと確信されています。人間は生

を受けて以来、一人で生きて行けなく他  
者との関わりの中で生きていた故に「全  
ての悩みがなくなる」ようなことはない  
のであります。何かにつけて弱い自分を  
いっぺんに強くするような、そんな力は  
ないし、それを求めてはいけません。「自  
分の弱さを受け入れる」ことが大事だと  
何千年も説かれてきているが、今もまだ  
人はこの言葉「すべての悩みがなくなる  
ような力を求めてはいけません」というシ  
ンプルな定石を実現できずにいますとも  
言われています。

人は誰でも苦しむし、誰でも悩む。例  
えば自分の過去に起きてしまったことは、  
誰にも変えられません。なぜ、あの時、  
ああいう事をしてしまったのか、もつと  
いい方法があったのではないかと、なぜ、  
それが出来なかったのか等々と、いくら  
悩んで、自分を苦しめ抜いたところで、  
起きてしまったことは、変えられません。  
起きてしまったことをどう、これからの  
向かってプラスにするか、マイナスにす  
るかがその人の生き方を変えるように思  
います。

失敗、過ちを犯したときに、それを自  
分自身がどうとらえるか?偉大な人とは、  
その失敗、過ちを犯さない人ではなく、  
過ちを犯しても、これを認める人と言わ  
れています。失敗は人を鍛え、最高の教  
師であるともいわれ、数多くの失  
敗があるからこそ、成功もあるのである。  
加藤さんは、「テレフォン人生相談」は

悩む人に部屋に明かりをつけて「出口はここですよ」と教えることで、悩む人の本心、本当の心を明らかにすると言われ、相談者は自分の本心を言わない意識的に嘘をついている訳ではないが、自分の本心に自分では気が付いていないと。それで、内側のところと外側のからだのバランスが崩れているので鬱になったりすると言われています。

「悩みに隠された真の動機」真の原因と症状を探り当てるのが回答者の使命ですと言ふことで長きに渡り悩める人の相談に答えて今も活躍されておられるようです。

さて、私のボランティアでやっている電話にも精神的に鬱病とか発達障害など言われる方からのしんどい、辛い、苦しい、死にたいという話が多く掛かっています。その中でも、週に何度も電話を掛けてこれられ、自分のしんどい、くるしい気持ちを感じてほしいという50代半ばの一人くらしの男性(15年来の躁鬱病)の電話を聞きました。当然、別の機会には私以外の電話相談員もこの人の電話を取るので、大体言われていることは自分が何も出来なく(ヘルパーが週6回と訪問介護週2回)最近は何にも出かけられず、生きていく意味が感じられない。アルコール依存症、DVで離婚、自己肯定感も低く、何かやろうとしても継続が出来ない、幼少期に人との関係が持てなかつた、いじめにあい、高校生の時は引

き籠りであったとの話は断片的には言われるのだが、この人の深く根を張ってしまった悩みの「自分が認めたくないものを中々、聞き出せてないし、本人も突き詰めてみたことがないのか言われませんか、自分で自分を傷つけてしまったのか、本心を明らかにしません。無論、専門家のカウンセラー、心理学者でもない私らのごときが、この人の根源的な問題を探り出し、本人からも其のことを話させて、悩み解決の出口を見出す力になるようなことは出来ません。ただ、辛い、苦しい話をただ傾聴して、寄り添い、共感しているだけでは、本人が本当の悩みに気づく切っ掛けになるのか? 声を出して話の聴いて貰って、胸のつかえは多少なりとも取れたかもしれないが、根本的な胸のつかえはとれないまま、時間がたてば、又、電話を掛けて来られます。

特に相談員は多分全国どこの「ボランティアの電話」も女性相談員が8割以上なので、女性相談員と話をする機会が多いので、相談者は女性の声と応対で母性的な母親に包み込まれるような「あんだ、大変やなあ。色々あるけど一人で悩んだらアカンで、又、何かあったら、いつでも電話してきてね」と言われたら、自殺を思い留める 危機介入の力とか、誰にも話が出来ない人にとっては、誰かと繋がっているという救いになっているようには思います。

私は、前述した男性の根源的な苦悩は、

幼少期の人との関係をうまく持てなかつり、いじめにあつたりしても、それをサポートして育ててくれなかつた両親と家族に対する恨みにあるのではないか? パワハラなどを受けたことで、それでアルコール依存症になり、DVで妻と離婚子供と離別、躁鬱病になり苦しんでいるのは、結果であり、それをたどる真の動機、原因を本人は考えたくないのか、どこかに置き忘れてしまっているのか。それを、突き詰めて考え、起きてしまったこと、親も選ばれなかつたし、どう育てられたかを向き合つて考えて、それから気持ちの整理をして、過去の事を学び直すという辛い作業をしないと、この人のしんどさは解決しないのではないかと思っています。これには、専門家の時間をかけたサポートがいると思います。この人は今は休んでいるようですが、病院の精神科がやっているデイケアにはずつと通われていたようですが。

最後にこの悩める人が、外にも出られず、何も継続出来ないと言ったので、これに対しては、友人が多発性筋炎という歩くことが出来なくなる、原因不明の難病で阪大病院に入院した。先端治療を3か月ほど受けたが、結局治らず退院させられ、自宅で閉じこもり、自殺までも考えるようになった。しかし、じつとしておくよりは歩けなくても、何とか玄関から外に出て、一歩、二歩と毎日、ちよつとずつ継続して歩数を増やし歩くように

頑張った。何と、6か月程続けると10キロ程歩けるようになり、それをずつと継続して歩いて今はジョッキングで6キロ毎日走れるようになった。これには医者もビックリしている、と助言をしてしまいました。

又、100キロあつて、膝も悪いと言われたので、それは、食事制限と運動、それこそ、外の空気を吸って一歩でも二歩でも歩く、無理をしなくても、継続したら体重も減るし、少しは気力も出るようになるのでは? ちなみにその友人も病気になる前は90キロを超えていたが、今は70キロ位になり歩くことと食事で体重が減った。これは、本当の事なんですよ、と言つたら、助かりましたありがとうございます。果たして、友人の話をどう受け止めて、それが出口になり、自分の状況をどう良くするかは、分からないが、多少はしんどい人にも母性的な応対だけでなく、助言を行う父性的な応対も時には必要であると勝手に思っています。



文芸に関わった者が書き残した書簡は全集にはまず必ず収められています、それを書いた人の人柄が鮮やかに浮かび上がってきて、かつ後世において読んで楽しいものは稀です。しかし、筆者の見た範囲では、その稀な例に夏目漱石と蕪村の書簡集があります。たとえば漱石です。漱石の書簡集を読んでいくとこの人物の心の動き、それも細やかで温かい動きが伝わってくるように感じられます。友人の正岡子規、妻の鏡子、弟子の寺田寅彦などに宛てた手紙などはもはや見事な作品といってもいい内容です。漱石は手紙を書くのが大好きであつたらしく自らも「小生は手紙をかく事と人から手紙をもらう事が大すきである」と弟子への手紙に書くほどでした。弟子への手紙で有名なのは死の年であつた大正五年八月二十四日に久米正雄と芥川龍之介に宛てた手紙です。

牛になることはどうしても必要です。われわれはとかく馬になりましたが、牛になかなか切れないのです。……中略……あせってははいけません。頭を悪くしてはいけません。根気づく

でお出でなさい。世の中は根氣の前に

頭を下げる事を知っていますが、火花の前には一瞬の記憶しか与えてくれません。うんうん死ぬまで押すのです。

それだけです。決して相手をこしらえてそれを押しちゃいけません。相手はいくらでも後から後からと出てきます。そうしてわれわれを悩ませます。牛は超然としていくのです。何を押しかと聞くなら申します。人間を押しのです。文士を押しではありません。

これを読んだ久米・芥川の両人は涙を流さんばかりに感激したことでしょう。「牛となれ、牛となつて人間を押し」という漱石の忠告は二人に届いたでしょうか。

その後、久米はともかく芥川は牛の道ではなく馬の道を歩んだのかもしれない。これは筆者の独断ではありますが。では、蕪村はどうであつたでしょうか。

彼の手紙には手元不如意を訴え無心ともいえるもの、ちゃっかりと絵の売り込みをはかったもの、目の中に入れても痛くない娘のことなど多様な内容があります。もちろん、上方の俳諧仲間や門人たちに向けた内容のものも多くあります。中には門人同士のもめごとを仲裁しようとした手紙もあります。そうした門人同士の仲違いの中でも晩年の蕪村が最も頭を痛めた門人が吉分太魯です。今回はこの太魯をめぐる状況と蕪村の人柄などを見ていこうと考えています。

吉分太魯は(一七三〇?) ~ (一七七八)

もと徳島の阿波藩士。本姓今田氏、名は為虎で通称は文左衛門。俳号は他に馬南、蘆陰舎などがあります。俳諧好きが高じて阿波藩を致仕して明和三年(一七六六)ころ京に上がり、几董とほぼ同時に蕪村に師事しました。蕪村の門人の中では几董と並ぶほどの実力となり、その後、安永二(一七七三)年秋に京都で上梓された「あけ鳥」という撰集では几董とともに重要な役割をはたし、その序文に「平安・浪華のあいだにも、まことの蕉風にこころざす者少なからず」と高らかにうたいあげて京を離れて大坂に乗り込んで

いきました。蕉風復興運動の旗頭として大きな期待をされての大坂行きでしたが、その期待を裏切ることなく太魯の活躍ぶりは予想以上のものがありました。二年後の安永四年には蕪村の春興帳には「浪花芦陰舎社中」として一門十三名の入集をみるほどとなっています。志慶という俳号をもち岸和田藩蔵屋敷名代をしていた大坂高麗橋三丁目の素封家芋屋吉右衛門(からむしやきちえもん)、大坂の俳人正名も太魯に弟子入りしており、当時浪花で最も注目を浴びていた狂歌師一本亭芙蓉花も手を差しのべていたようです。また、虎雄という新進気鋭の若い俳人も太魯のもとで育てられました。こ

の時期が太魯の絶頂期でしょう。

同じ年の安永四年の十月。蕪村は太魯とともに大坂の遊行寺で営まれた芭蕉忌法要に参加し、大阪湾を一望できる四天王寺の支院である新清水寺の隣にあつた料亭浮瀬(うかむせ)で遊んでいます。この料亭は見晴らしもよくかつては芭蕉も足を運んだ有名な店でした。それもあつてか蕪村はかなりの上機嫌となり、その高揚した気分が高じて帰りがけの舟、淀川を京へと行く舟ですが、その舟の中でこんな句を吟じています。

淀の夜船

霜百里 舟中に我 月を領す

霜が降りて見渡す限り広がる白銀の世界。今、自分は天空に輝く月を独り占めしている、というまことに気宇壮大な句です。よほどいい気持ちのままに一気に吟じたのでしょうか。

このときまでは太魯は蕪村のよき門人でした。

実をいえば天空に輝く月は俺一人のものだと豪勢に吟じた安永四年(一七七五)は蕪村自身が

さても愚老儀、当年は悪星の障碍に候や、夏冬を経て病におかされ、よう



やく全快いたし候ところ、またまた霜月下旬よりころあしく、うるう月(安永四年は十二月が二回あった)に至り候てはもつてのほかにて、とかく老病と存じられ候

安永四年閏十二月十一日付 霞夫・乙総宛

と手紙に書くほどの「悪星の障碍(運勢の悪い星回り)」の年でした。ですから十月の大坂行きはたまたま小康の時にもつた時間なのでした。

あくる安永五年(一七七六)、蕪村は還暦を迎えます。「悪星の障碍」といつていた最悪の年も終わり「今年こそ」と本人も期待したことでしょう。しかし、この年もまた多難であり、頭を悩ませた問題は太坂にありました。羽振りのよかつた太魯の身辺でとんでもない事態が進行していたのです。

安永五年二月十八日付の正名宛の手紙には「太魯から来た手紙の件で几董が伝えてきたことがあった」と前置きして次のように書かれています。

東菴(「とうし」と読み正名のこと)様と雅俗とも絶交いたし候とのこと。これは蚊しま法師(蕪村の友人でもあった上田秋成のこと)上京にて、あらあら承り候。さもあるべき御事とは存じ候へども、左様に急に絶交とは驚き入り申し候。もちろん芦陰法師(太魯のこと)不埒(ふらち)はさぞと存じ候へども、し

ばらくも御懇意になられ候ふ御義に候へば、何とぞ思召しかへられ、今一度和平を御調(おんとの)いください候はば、愚老においても大慶の至りに存じ奉り候。

「雅俗とも絶交」とは正名とは俳諧上の付き合ひも日常の交際も一切絶交するという意味です。これは以前から火種があったらしく芦陰舎の中ではそうした社中の分裂・解散へとなりかねない動きがあるとすでに友人の上田秋成から蕪村は聞いていたようです。

その原因は太魯の「不埒」にありました。太魯の周囲にいた人が残した資料から近世文学研究者の穎原退蔵は太魯の人となりや次のようにまとめています。

彼(太魯)の性行に面白くない点が多かつたことは察せられる。おそらく薄志弱行で激しやすく冷めやすく、かつ放縦狷介な人物であつたのだろう。

太魯がすぐにかつとなり、しかもワガママかつ気ままであり自分の意志をどこまでも押し通し人と妥協しない性格であつたとすれば俳諧集団を維持していくには大きな困難があつたといふべきでしょう。そして何かの論争・いさかいの折りに「お前とはやつていられない」という言葉が出たかもしれず、いったん口に出した以上は頑としてその言葉を太魯が撤

回しないという事態が続いたのでしよう。これでは芦陰舎が消えてしまふと案じた蕪村は「非はすべて太魯にある」としますが、「今一度和平を御調」えてくださいと正名に懇願しています。

これは筆者の想像ですが、こうした状況を蕪村の周辺に伝えたのが太魯自身の手紙だそうですから、正名は事態を穏便にすまそうと蕪村に知らせなかつたかもしれず、かつとなつたら突き進む太魯ですから周囲の付度などまつたく無視して師匠の耳にも届くことを百も承知で一気にぶちまけたのでしよう。

蕪村の懇願もあつてか、または正名たちが大人の対応をしたためか、ともかくも芦陰舎は何とか秋までもちましたが、十月(今の十一月の中頃です)にもなる」と事態は行き詰まりを見せるようになりました。この閉塞した状況をなんとかするために蕪村は太魯の身から出たサビとはいへ太魯を救わねばとやむなく京から大坂へ向いました。たぶん蕪村に出馬を促したのは正名や志慶たちであつたらうと考えられます。しかし、この大坂行きは不調に終わります。原因は蕪村の思わぬ大病でした。風邪気味であつた体をおして伏見を發つて夜の淀川を下つて大坂まで行くというのは蕪村の年齢からいってもかなりの強行軍でした。大坂の天満に到着したとき蕪村は疲労困憊の状態でした。夜通し淀川の晩秋の川風に吹かれたためか風邪をさらに悪化させたらしく、そのまま寝込んでしまいました。今のインフルエンザのような症状で高熱にうなされて「もしや」という予感が本人の頭をよぎるときもあつたらしい。もちろん太魯とも会えず所期の目的は果たせませんでした。このとき思いを帰落して後に出した正名への手紙で次のように書いています。

く、そのまま寝込んでしまいました。今のインフルエンザのような症状で高熱にうなされて「もしや」という予感が本人の頭をよぎるときもあつたらしい。もちろん太魯とも会えず所期の目的は果たせませんでした。このとき思いを帰落して後に出した正名への手紙で次のように書いています。

(十月五日、夜の淀川を下つて大坂に來たが風邪こじらせて高熱に苦しむ)かの隻履を手にして西天に去り給ふためし、愚なる身には尊くも憂れはしくはべりけるに、志慶・東菴の両子、湯薬のことなどまめやかにものし給へりければ、病とみにおこたり、夢の回りにたるごとく覚えて、

手にとらじとても時雨の古草鞋(ふるわらじ)

甘棠居にやどりて

千鳥聞く夜を貸せ君が眠るうち

病蕪村

「甘棠居」は志慶の庵の号で高麗橋にあつた本宅の一室だと考えられます。「かの隻履を……ためし」は達磨大師が死後に片方の履き物を携えて西天に飛び去つた故事のこと。この言葉から蕪村が死を予感したことが分かります。「病とみにおこたり」は「病気がすぐ直つた」の意で「手にとらじとても時雨の古草鞋」の

句意は「時雨に濡れた古草履をもつことなどとてもできません。あなたの看病のおかげで達磨のように死ぬこともありませんでした」です。また、「千鳥聞く夜を貸せ君が眠るうち」の句意は「病氣であつても千鳥を聞く夜の宿を貸してください、あなたが眠っている間だけ」であり平癒の知らせと看病の御礼の句となっています。二句ともに病の床から離れられた余裕が感じられます。さらに「君が眠るうち」には看病をしていた人への優しい心づかいまでもが感じられます。

蕪村は大病を患つたわけですが、看病したのは志慶・東留で太魯の名前は見えません。意固地な彼は志慶・東留兩人に顔を合わせるのを避けたのかもしれない。

#### 四

前段であげた蕪村の文章で気になる言葉は「夢の回りたるごとく覚えて」です。これは芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかくめぐる」という句を念頭において出た言葉ではないか、という研究者の説があります。

病中吟ですが芭蕉の辞世のようにいわれている一句ですが、芭蕉末期の吟詠であることは確かです。これを意識して蕪村が「夢の回りたるごとく」といった可能性は充分にあると筆者も考えます。しかも芭蕉終焉の地も同じ浪花の大坂。自

分もまた芭蕉と同じ土地で死ぬのかと深い感慨を催したのでしょうか。蕪村がこうした思いをもつたのにはもう一つ訳があります。

芭蕉がどうして住いのあつた江戸ではなく大坂で亡くなったのか。それは心ならずも浪花に行く必要性に迫られたからです。一六九四（元禄七）年五月、清書されたばかりの「奥の細道」を携えて江戸を発つた芭蕉は伊賀の生家、京・大津あたりの門人のあいだを歴遊していました。八月になると伊賀の生家において門人・知友を招いて月見の宴を開いています。この頃すでに大坂の門人の間でもめ事が起きていました。ことは洒堂と之道の二人の門人のいさかいでした。大坂に門戸を構える門人どうしの縄張り争いのようなもめ事で芭蕉もウンザリしていたようです。しかし、捨ててもおかげ月見の宴の前、八月九日に京の去来に宛てた手紙の中で「さてさて不届き者ども、さながらうち捨て候もおとならずと存じ候」と述べて両者の仲を取り持つために伊勢に向う予定を止めて九月には大坂に行くことを表明しています。九月九日に芭蕉は大坂に到着し洒堂と之道の二人の仲裁を試みるのですが、不首尾に終わります。仲介が不調であつただけではなく、芭蕉は体調を崩していきます。九月末には寝たきりとなり、十月十二日、ついに息を引き取ります。気が乗らないままに出かけた大坂で死を迎えるとは芭蕉

にとつて思いもかけぬことであつたでしょう。一ヶ月に及んだ闘病、それも死に向う病の中で吟じられた句が「旅に病んで夢は枯野をかくめぐる」です。

蕪村は芭蕉が大坂に来なければならなかつた事情を知つていたとは限りませんが、芭蕉と同じ大阪の地で死を迎えるのか、という思いがよぎったとき、蕪村は芭蕉との不思議な関わりを感じたのではという近世文学の研究者の指摘があります。その指摘からすれば「夢の回りたるごとく覚えて」という言葉が出て来ていることや「時雨の古草履」という芭蕉を思わせる句が吟じられていることも納得ができます。蕪村は高熱でうなされる床にあつて芭蕉の人生に思いをはせ、芭蕉の姿を夢の中で見たのかもしれない。

#### 五

還曆を迎えた蕪村があやうく落命の危機にあいほうほうのていで大坂行きから帰つてから数日後の十月十八日に正名は蕪村の手紙を受け取ります。手紙は次の言葉で始まります。

さて此の程は存外の長滞留、ことに病中何かと御厄介の至り、御徳蔭ごといんをもつて微恙(びよう)さつそく平常に復し候て大慶つかまつり候。帰庵後、随分堅固には候へども、おびただしく用事重なり困り申し候。

「御徳蔭をもつて」は「おかげさまで」の意で「微恙」は「軽い病氣」の意です。この手紙からすると病氣のためとはいへ大坂での逗留がこれほど長きにわたるとは蕪村自身も想定外であつたことが分かります。看病にずいぶん世話になつたと礼を述べた上で、病も軽くすんですつかりよくなつたといっている。そして、帰

洛後、すぐに礼状を送べきであつたが多用のため遅れてしまつたと丁重に断るといふ細かい気遣いも見せています。蕪村の人柄がよくうかがわれるところです。

この後、蕪村は年末に娘との結婚、そして翌年の五月には娘の離婚とバタバタとした日々を送りますが、その間にも太魯と芦陰舎の状況は悪化していきま

す。久しぶりに出した十二月十三日付の正名宛の手紙には娘の婚礼披露の宴会の様子を伝えた後に次のように記します。

芦陰舎いかが候や。久しく御出会もこれ無き様子、いぶかしく存じ奉り候。とかく御捨てなう御鼓吹なされつかわされくださるべく候。愚者において御たのみ存じ奉り候。

「太魯はどうしてしますか」という言葉から始まり、正名ですら久しく会っていない様子で心配だと述べています。親しかった正名ですら長らく会っていないようでは大坂芦陰舎に集う人たちの気持ち

はバラバラとなっており、きつとお互いに気まずい関係になっていたと蕪村には予想されたのでしょうか。そうであれば、集まつて風雅にふけるなどということは無理な話となります。そのため蕪村は平身低頭というていで正名に「どうか太魯を見捨てることなく励ましお引き立てくださいますように」と懇願しています。

娘の結婚、そして離婚と続いたこの時期に蕪村には自ら大坂に向く余裕はなかったのです。しかし、京の夜半亭宗匠蕪村からこうまで頼まれたとしても正名にはもうどうにもできなくなっていたのでしょうか。翌一七七七(安永六)年四月、蕪村が最も信頼した弟子であり太魯の親友でもあった几董は一縷の望みをかけて大坂に向いました。しかし、すでに仲裁をするという段階ではなく、芦陰舎の後始末をどうするか、という課題に几董は奔走することがやつとのことでした。

そして、同年の五月二十四日、蕪村は半年ぶりに正名宛に手紙を送っています。時候の挨拶や娘の離婚の事情を伝えた手紙に次の一条があります。

太魯一件、さぞ御聞きなされ候はんと存じ奉り候。かねて御察しの通りにて、なお行く末おぼつかなき事に気の毒仕り候。

「気の毒仕り候」とは「蕪村が」気を悩ませている」の意で、これから太魯が

どうなっていくか心配でならないといっているのです。困った弟子だと思いがながらも心配で仕方がないという蕪村の気持ちがよく出た言葉です。

この蕪村の手紙から察せられるとおり太魯はこの五月に大坂を離れ兵庫の地へと去つていきました。大阪を去るにあつて太魯は「感懐」と題する八句を連作しています。そこから二句を紹介します。まず、冒頭句です。

① 浪速津に庵求めて五年の月日を過しけるに、障ることはべりて、宿りたち出る日、友どちに申す。

濁り江の 影ふり埋め 五月雨 (芦陰句選)

② 妻児が漂泊ことに悲し

我にあまる 罪や妻子を 蚊の食ふ (芦陰句選)

①は季節がら降り続く五月雨の大量の雨水に大坂で暮らした日々の記憶をすべて埋め尽くし流し去つてほしいという思いを述べた句です。②は前書きにあるとおり自分の罪によつて妻子に苦勞をかけてしまうという痛切な思いを吟じた句です。①と②の句を見ると激しやすく性格であつた半面、涙もろく純情なところもあつたのでしょう。

確かに太魯は同じ蕪村の一門ではあつても召波や几董のように蕪村の句風(た

たとえば歴史や古典に材を取つて空想の句を作る(ことなど)にならうことをせず、その純情な性格のままに平淡で直接的な句をよく吟じました。例えば次の句です。

③ 初しぐれ真昼の道を濡らしけり  
④ 思ひ出て庭掃く春の夕べかな  
⑤ 河内女や干し菜に暗き窓の機(はた)  
⑥ 山風や霰(あられ)吹き込む馬の耳  
⑦ うぐいすの呑むほど枝のしずくかな

いずれも太魯らしい素直な句です。⑤の「干し菜」は「大根の葉やカブラの菜を陰干ししたもの」です。藁屋の窓に干し菜がいつぱい吊るしてあり、その窓際に薄暗い灯りをつけて河内の女性が一日中木綿の機織りをしている。干し菜の句としてはかなりかわつた情景の句です。

太魯が兵庫に去つたその年の春に出版された大坂案内「難波丸綱目」に大坂在住の俳諧師の名寄せ(俳諧師の名前のリスト)に次の一項がありました。

蕉門 伏見町筋 太魯

大坂にやつてきて五年。ついに天下の「蕉門宗匠」という社会的な認知を得たということを示しています。皮肉なことです。この「難波丸綱目」が出たときにはすでに太魯は大阪を去らざるを得ない状況にあつたわけです。

「太魯の行く末が心配だ」と手紙で述べている老宗匠蕪村の心の中は複雑であつたに違いありません。

## 六

こうして兵庫に移り住んだ太魯ですが、ほどなく病を得て京で療養につとめました。翌一七七八(安永七)年十一月十三日、蕪村・几董に看取られながら京で亡くなりました。享年四十九。その一周忌を期して、かつて仲違いをした大坂の門人たちの手で太魯を追悼遺吟集「蘆陰句選」(安永八年十一月刊)が上梓されました。当初蕪村は個人句集の刊行に日常の声誉を損なうものだと疑問を呈していましたが、そのできばえを賞美してその序文を書いています。その序文の中で蕪村は彼の太魯評ともいえる言葉を記しています。

太魯はもとより撰播雒陽(せつぱんらく)くよしの一大家と呼ばれて、我が門の囊錐(のうすい)なりし。されば、その佳句秀吟は人おのおの膾炙(かいしや)す。

「撰播雒陽」は「撰津・播磨・洛陽(京)」のこと。「囊錐」とは「錐の先が袋を突き破つて外に出るように才能ある人は衆人の中にあつても際立つ」ということ。「膾炙」とは「世間でもてはやされ

評判となること」です。先の③からの⑦の句を見ても師の蕪村とは違う句風で句を吟じた太魯ですが、その太魯の俳諧作者としての天分を蕪村は認めて「我が門の囊錐」と称賛しています。

六十二歳の蕪村が兵庫に移り住んだ太魯に送った一七七七(安永六)年十二月二日付の手紙には「囊錐」の弟子であった太魯への気持ちがよく出ています。また寒気激しい中で「御壮健にお暮らし、めでたく存じ奉り候」と大慶の挨拶をした後で太魯が送って来た句について次のように書いています。

御句あまた、いづれもおもしろく承り候。……中略……浪速にお住まいの時よりは、けしからぬ超乗にて候。当地社中みなみな御うわさ申し出で候。あるが中に  
足を折りて頭(かしら)に余すふとんかな

愚老三十年前の作に「かしらにやかけつむ裾にやふるぶすま」とわび寝の床に屈伸を定めかね候。足を折りて坊主頭を憐れみたる才覚、愚が及びがたきころに候。  
ともし火に氷れる筆を焦(こ)がすかな  
愚句に「齒あらはに筆の水を嚙(か)む夜かな」と貧生独夜の

感をつぶやき候。子(し)と詠み「あなた」の意もまた寒燈に狸毛を焦がしたるあはれ、いわんかたなく候。よき兄弟句と存じ候。

「けしからぬ超乗」とは「大変な上達です」の意で「貧生」は「貧乏書生」のこと。また「狸毛」は「筆」のことで「兄弟」とは「題を同じくした似合いの兄弟のような句」のことです。失意にある太魯を励ましその句を高く評価しています。太魯へのふだんの接しように見えるような手紙です。

以上のように見てくると晩年の漱石も蕪村もともに弟子に向けたその手紙には温かい気持ちがあふれています。気にかかると弟子はいつの時代でもかわいく感じられるのでしょうか。なお、太魯の墓は蕪村の墓がある洛北の金福寺にあります。蕪村の墓のすぐそばにありますので、何かの折にはお立ち寄りください。

## 隠された歴史(41)

満田 正賢

乙巳の変は、中大兄皇子らによつて蘇我入鹿が暗殺され、蘇我本宗家が滅亡した事件です。そして、それをきっかけに孝徳天皇が即位し、いわゆる「大化改新」が進められ、前期難波宮(難波長柄豊崎宮)が造られたと日本書紀は記しています。一方、古田史学では、孝徳紀に大化、

白雉という九州年号が現れることなどから、孝徳紀の記事の大半は九州王朝の記事を借用したものであり、前期難波宮は九州王朝の複都であったとする研究が進んでいます。

私は、孝徳天皇即位のきっかけとなった乙巳の変に隠された史実があるのではないかと考え、舒明、皇極、孝徳、斉明紀に出てくる「大伴長徳(馬飼)」及び「巨勢徳太」「犬上健部君」という人物の動向に注目しました。

なお、考察の中心となる「大伴長徳(なかとこ)」「字は馬飼」は大伴(伴)氏系図では、蘇我物部戦争に出てくる大伴咋(くい)の子であり、万葉集の編者・大伴家持の父で征隼人持節大將軍となつた大伴旅人の祖父となっています。大伴長徳(馬飼)は大化五年に右大臣になり、翌々年の白雉二年七月に没しています。しかし、大伴長徳(馬飼)に関連する各記事を詳細に検討すると、大伴(伴)氏

系図に隠された人物像が見えてきます。

舒明紀、皇極紀、孝徳紀、斉明紀の中で、大伴長徳(馬飼)・巨勢徳太・犬上健部(たてべ)君が出てくる記事を列挙します。(訳文は「日本書紀原本現代訳」山田宗睦訳を使用しました。)

①舒明四年冬十月四日、唐国の高表仁らが難波の港に泊まった。大伴連馬養を遣わして、江口で迎えた。

②皇極元年十二月十三日、はじめて息長

足日広額(おきながたらしひひろぬか)舒明(天皇の喪(式))をもつた。

この日、小徳巨勢臣徳太が、多派(おまた)皇子に代つて誅(しのびごと)をした。つぎに小徳粟田臣細目が軽皇子に代つて誅した。つぎに小徳大伴連馬飼が、大臣に代つて誅した。

③皇極二年十一月一日、蘇我入鹿は小徳巨勢徳太臣、大仁土師娑婆(はじのさば)連を遣つて、山背大兄王らを斑鳩に掩(おそ)つた。(或る本

はいう。巨勢徳太臣、倭馬飼首を將軍とした。)

④皇極三年夏六月一日、大伴馬飼連が、百合の花を献じた。その茎の長さは八尺、その本はべつべつで、末は(二つ)に連なつていた。

⑤(孝徳紀)皇極四年六月十四日、そこで、軽皇子は、固辞することができなくなり、壇にのぼつて即位した。このとき大伴長徳連(字は馬飼)が、



金の鞆(ゆき)を帯びて、壇の右に立った。犬上健部(たてべ)君が、金の鞆を帯びて、壇の左に立った。

⑥大化元年秋七月十日、巨勢徳太臣は高麗使に詔して「明神御宇日本天皇の詔旨は(中略)」といった。また百濟使に詔して、「明神御宇日本天皇の詔旨は(中略)今かさねて三輪君東人、馬飼造(名を欠く)を遣わす」といった。

⑧大化五年夏四月二十日、小紫の巨勢徳陀(とこだ)臣に、大紫を授けて、左大臣とした。小紫の伴長徳連に大紫を授けて、右大臣とした。

⑨齊明四年春正月十三日、巨勢徳太臣が薨じた。

最初に考察するのは、伴連馬飼(馬養)の初見記事です。伴連馬飼(馬養)は唐の使者、高表仁を難波で迎える役として、唯一人名前が記されています。中国の唐代の歴史を記した唐書(旧唐書)には倭国伝と日本伝の二つが別に記載されていますが、古田史学では、旧唐書に貞観二十二年(六四八年)の記事まで記載された倭国が九州王朝であり、長安三年(七〇三年)の記事から記載が始まった日本国が近畿王朝という別の王朝であったと考えています。そうであれば、旧唐書倭国伝に記された唐の使者・高表仁を難波に迎えた伴馬飼と九州王朝とが無関係であったとは考えにくいことです。

次に、山背大兄王襲撃記事を考察しま

す。ここでは、伴連馬飼と共に舒明天皇の喪式で弔辞を代読した巨勢臣徳太が登場します。「蘇我入鹿の命を受けて山背大兄王の襲撃を行なった」という記述から判断すると、巨勢臣徳太は蘇我入鹿の手先であったことになりませんが、その巨勢臣徳太が、蘇我本家を倒した孝徳朝において、大化五年に左大臣に昇進しています。山背大兄王襲撃事件では蘇我入鹿の手先となっていたはずの巨勢臣徳太が、そのわずか二年後に起こった乙巳の変においては、蘇我入鹿を暗殺した孝徳・中大兄側についていたのは間違いありません。これは不思議なことです。

私は、山背大兄王襲撃事件において襲撃を指示したのは、蘇我入鹿ではなく、孝徳(又は中大兄)ではなかったか、そして、その功績によって巨勢臣徳太は左大臣に昇進したのではないかと考えています。又、伴連馬飼も乙巳の変の後で右大臣に取り立てられているわけですから、巨勢臣徳太と同様に、蘇我本家を滅亡させた乙巳の変において孝徳・中大兄側として活躍したのは間違いありません。

なお、この山背大兄王襲撃記事には「或る本はいう。巨勢徳太臣、倭馬飼首を將軍とした。」

という一文が附記されています。倭馬飼首という正体不明の人物については、後で触れたいと思います。

次の考察は、孝徳天皇即位の経緯につ

いてです。孝徳天皇即位の事情は次のように記されています。①皇極天皇は中大兄皇子に天皇位を移譲したいと伝えた。

↓②中大兄皇子は退座して、中臣鎌子(鎌足)連に相談したところ、異母兄の古人大兄皇子がいるので、しばらく叔父の軽皇子(孝徳)を天皇にして様子を見たほうが良いと提言され、それを皇極天皇に伝えた。↓③皇極天皇が(皆の前で)軽皇子に天皇位を譲りたいと告げたのに対して、軽皇子は、古人大兄皇子が天皇になるべきだと固辞したが、古人大兄皇子は、皇極天皇の聖旨に順うべきだと言って、佩刀を解いて、法興寺に行き出家した。↓④そこで、軽皇子は、固辞することが出来なくなり、壇に上って即位した。

孝徳天皇即位の経過に関する記述に従えば、軽皇子(孝徳)を天皇に仕立て上げたのは、乙巳の変を計画したのと同様に、中大兄皇子と中臣鎌足であったということになります。

しかし、最近の発掘調査で、孝徳天皇が造営したとされる前期難波宮が、中大兄皇子が孝徳天皇を一人置き去りにして飛鳥に引き上げた後も造営を続けている、と見做しうる考古学的証拠が多く見つかっていることから、中大兄皇子の行動に関する日本書紀のすべての記述が真実であるとは考えにくくなっています。孝徳天皇即位の経過に関する記述は、おそらく日本書紀編纂時の、「天智天皇と藤原鎌足が大化改新を進めた」とする、歴史

創作の方針に従った作文であると思われる。

又、古人大兄皇子が、天皇の意向を知ってその場を去り仏門に入った経緯は、大海人皇子(後の天武天皇)が天智天皇危篤の枕元で、自分は出家するので、大友皇子を皇太子にしてほしいと言った場面に酷似しています。古人大兄皇子の行動に関する記述も日本書紀の作文であろうと思われる。

それでは、孝徳天皇即位の真実はどこにあるのでしょうか。その鍵は「伴長徳連(字は馬飼)が、金の鞆(ゆき)を帯びて、壇の右に立った。犬上健部(たてべ)君が、金の鞆を帯びて、壇の左に立った。」という即位(踐祚)式の儀式の描写にあると考えます。一見すると伴長徳連と犬上健部君は金の鞆(二矢をいれて背に負う武器)を携えていることから、即位する孝徳のボデーガードのように見えますが、この場面は、新天皇が皇位を受ける踐祚式の場面です。

踐祚式の儀礼については、持統天皇が即位する際に「物部麻呂朝臣が大楯を樹てた。神祇伯中臣大嶋朝臣が、天神の寿詞(よごと)を読んだ。終わって忌部(いんべ)宿禰色夫知(しこぶち)が、神璽の剣、鏡を皇后に奉った。皇后は天皇位に即いた。」と記されています。この場面に登場する物部麻呂朝臣(物部氏)も神祇伯中臣大嶋朝臣(中臣氏)も忌部宿禰色夫知(忌部氏)も共に神儀を取り扱

う氏族です。しかし、このような踐祚式の儀礼の様子は持統紀以前には記されていません。

孝徳天皇即位の場面で壇の左に立った犬上健部君の名前は、日本書紀にこの時以外出てきません。しかし、犬上君と記されていることから、最後の遣隋使（推古二十二年）と最初の遣唐使（舒明二年）に派遣された犬上君御田歙（みたすき）本人か、その一族であろうと思われる。ここでも旧唐書倭国伝に記された遣唐使の主要人物が出てきます。旧唐書倭国伝に記された倭国が九州王朝であるとすると、犬上君御田歙も九州王朝と関連する人物であることとなります。

孝徳即位後任用された重臣としては、左大臣阿倍倉梯麻呂（内麻呂）、右大臣蘇我倉山田石川麻呂、内臣中臣鎌子連、国博士・沙門旻法師、高向史玄理の名前が記されていますが、大伴長徳連と犬上健部君は重臣として記されていません。重臣でもなく神儀を取り扱う氏族でもない人物が踐祚式の壇に上ったこととなります。

しかし、犬上健部君も大伴長徳連（二字は馬飼）も九州王朝と関係する人物であったとすると、説明がつきそうです。つまり、九州王朝と関係する人物が孝徳天皇の踐祚式の壇に立って即位を認めたということではないでしょうか。なお、九州王朝論の立場に立てば、この時の倭国の天子は九州（筑紫）にいますので、

蘇我本宗家を倒した孝徳天皇を九州王朝の臣下たる近畿の首長として、九州王朝の代理者たる犬上健部君と大伴長徳（馬飼）が認めたとしたこととなります。

ここで、大伴氏について触れてみたいと思います。大伴氏は謎の人物を多く輩出しています。例えば、推古三十一年に、「其の年に、大徳の境部臣雄摩侶、小徳の中臣連国を大將軍とした。小徳の河辺臣禰受、（中略）、小徳の大伴連（名を欠く）、小徳の大宅臣軍（いくさ）を、副將軍とした。」という記事があります。又、推古天皇崩御の後、次の天皇を選ぶ際に「天皇の遺命に従うべき」と意見を言った大伴鯨も、大伴氏家系図に出てこない謎の人物です。

私は「隠された歴史（8）」において、「宣化天皇の嫡子である倉若江王が那津官家に入って後期九州王朝を立ち上げた。そして、宣化二年に、『筑紫に留まって、その国政を執行した』と記された大伴磐が、後期九州王朝の中心人物となった」と考察しました。大伴氏の中には、九州王朝の直接の臣下として筑紫にいた人物が謎の人物として多く含まれているのではないかと思います。

又、山背大兄王襲撃記事で取上げられた「或る本」の中の倭馬飼首という正体不明の人物も、大化元年に、「百濟使に詔して、『（中略）今かさねて三輪君東人、馬飼造（名を欠く）を遣わす』とい

った。」という記事にある馬飼造（名を欠く）という人物も、大伴連馬飼と共通した「馬飼」という名を称していることから、大伴連馬飼と関連した人物かも知れません。

倭馬飼首の「倭」については「やまと」ではなく、遣唐使の内容を記載した第一史料といえる伊吉連博徳書にある「別倭種（九州王朝の人物と考えられている）」と同様の意味を持つのではないかと思います。そうであれば、九州王朝は蘇我一門たる上宮家の山背大兄王らの襲撃事件に直接関与した可能性もあるのではないのでしょうか。

## マルクスから学ぶ（二）

### 成瀬 和之

今回も「貨幣」の続きです。

最近、現代貨幣理論（MMT）が話題になっています。

MMTというのは「政府は通貨発行権を持つているから通貨を限度なく発行できる、自国の通貨建ての国債が返済不能になることはない、したがって財政赤字が大きくなっても問題はない」と言う考

え方です。

MMTの理論は、新自由主義の基づく「小さな政府」論、緊縮政策に対して、たまりにたまった不満の歴史的な爆発でしょう。欧州の左派やアメリカのサンダースさんが反緊縮の対抗軸としてMMTの理論を根拠としています。この理論は、「有効需要の創出」（購買力のある需要の政府による創出）を主張するケインズの流れに立つものです。

日本でも、新自由主義、今の財務省の緊縮政策そのものが、もう歴史的に限界に来ていて、目の前に困っている人がいたら借金してでも助けるのが政治の役割ではないかということでした。

しかしながら、このMMTの理論がこれから本当に人々のための財政支出、例えば社会保障とか生活予算とかに使われるのでしょうか？ ひよつとしたら、もつと借金していいですよと、あと一〇〇兆円、二〇〇兆円大丈夫ですよと、都合のいいところだけが利用されて、結局リニア新幹線の推進など「不要不急」の公共事業とか、軍事費の増大とか、株価を吊り上げるために、危なく使われる可能性があります。学者さんたちの知的なシミュレーションとかいろいろな研究、「経済理論」のいいところだけ切り取って都合のいいように使う、そういう点は非常に警戒する必要があります。アメリカではインフレや金価格の高騰（逆に言うと通貨価値の下落）が始まっています。

財政政策を考える場合、短期的な政策と、中長期的な政策を区別して考える必要があります。短期的には、コロナ危機の現在、国債を発行してでも民を救う必要があります。しかし、中長期的には「誰から税金を取り、誰に使うのか」、富裕層への課税、医療・社会保障の充実など格差拡大の是正のための富の再配分の財政機能の強化が求められます。

アベノミクスを「アホノミクス」と痛烈に批判する浜矩子さんが『洗脳された日本経済』（日本文芸社、二〇一九年）で次のような趣旨のことを言っています。

という時に機動的に動けないかもしれない。

アベノミクスと維新政治のダブルパンチのために大阪では「レスキュー隊」機能がすでにマヒ状態になり、コロナによる死者が全国最多となっています。

ここ数年、夏に山歩きをしていて、「今年は異常気象だ」と山仲間と話すのが毎年のこととなっています。コロナ危機も森林伐採や地球温暖化が背景にあると言われます。ひよつとするとコロナ危機は、もっと大きな危機の「スタート」なのではないのか？ そう感じるこの頃です。さらに軍事対軍事、戦争の危機が迫っています。

一〇〇年前からの日本史年表をもう一度掲載します。

一九二二年二月一日 過激社会運動取

締法案提出（治安維持法の原型、審議未了で廃案）

一九二二年 全国水平社、日本農民組合、日本共産党相次ぎ創立。

一九二三年 関東大震災（朝鮮人虐殺）

一九二五年四月 治安維持法公布

五月 普通選挙法公布  
一九二七年三月 金融恐慌 六月 東方会議「対支政策綱領」（「満蒙」生命線論が国策に）

一九二八年 治安維持法を緊急勅令で最  
高刑死刑に改悪。全県警察に  
特別高等課設置（「特高」の  
始まり）

一九二九年三月 治安維持法に反対した  
山本宣治暗殺

一九三二年九月一日 「満州事変」（南  
満州鉄道を関東軍の石原莞  
爾らが自ら爆破し、一五年に  
及ぶアジア太平洋戦争に突  
入）

一九三三年三月 「満州国建国」宣  
言

一九三三年 滝川事件（滝川幸辰の自由  
主義的刑法学説発売禁止）

一九三四年 陸軍省軍事調査部『思想戦』  
の小冊子作製

一九三五年 美濃部達吉の「天皇機  
関説」事件（国体に反す  
るとされた）

一九三七年 「日華事変」（日中全  
面戦争）

一九四五年 敗戦。アジアの人々2  
000万人以上・日本人  
310万人の死者、そして、  
膨大な借金。

一〇〇年前の一九二二年から、関東大  
震災、治安維持法、金融恐慌、世界恐慌、  
そして「満州事変」「満州国建国」からの  
一五年戦争。次々と大事件が続きました。

さて、一〇〇年後の今、二〇一一年の  
東日本大震災・福島原発事故からの年表  
です

二〇二二年一月 内閣官房副長  
官に警察官僚出身（元内閣情  
報調査室長）の杉田和博就任  
（九年間、政府の事務方のト  
ップ）

二〇二三年秋 日本維新の会「歴史  
問題検証プロジェクト」チ  
ーム結成。事務局長は杉田  
水脈（のち自民党へ）

二〇二四年四月一日 「産経新聞」  
朝刊から「歴史戦」シリ  
ーズ開始

七月一日 集团的自  
衛権行使容認の閣議決  
定

二〇二五年九月一日 安保関連  
法強行採決（「満州事変」を  
始めた九月一日の次の日）

二〇二七年六月一日 共謀罪法  
成立

二〇二七年八月 杉田和博内閣人  
事局長兼任

二〇二八年八月一日 吉村洋文大  
阪市長「慰安婦像」を理由とし  
たサンフランシスコ市との姉妹  
提携の解消公表

二〇二〇年～二〇二二年 新型コ  
ロナ・パンデミック

二〇二〇年一月一日 学術会議

任命拒否事件（誰が指示したのか？）

二〇二一年二月二七日 大阪府

と「読売新聞」大阪本社の包括連携協定

『歴史戦と思想戦』（山崎雅弘著、集英社親書）という本があります。戦前の「思想戦」と現在の「歴史戦」は似ていませんか？ 本の帯に四人の識者の推薦文が載っています。その内の二人だけ紹介します。

「歴史戦」と称する企てがいかに日本人の知的・倫理的威信を損ない、国益に反するものであるかを実証的に論じている」（内田樹）

「負の歴史を否認する『歴史戦』。本書はその論理のトリックや誤謬を徹底的に暴いた」（東京新聞）記者、望月衣塑子

二月二四日、ロシアはウクライナ侵略を開始しました。「武力による威嚇又は武力の行使」による他国の主権と独立、領土保全の侵犯を禁ずる国連憲章、国際法に対する明確な侵犯です。戦前の「大日本帝国」の「満州事変」「満州国建国」とそっくりではありませんか。しかも核兵器を持つ「常任理事国」です。こんなこ

とを許せば、世界は「万人に対する万人の闘争」（ホップズ）弱肉強食の「無法地帯」になってしまいます。

九年前の二〇一三年にはロシアの学校用歴史教科書を国が統一する方針を打ち出し、「愛国心の養成」が歴史教育の主目的と位置付けられ、ソ連時代のナチスと手を組み、ナチスのポーランド侵攻を呼び込んだ「独ソ不可侵条約」、「カチンの森」の虐殺などなど「負の歴史」を抹消する「歴史の修正」が、幅広い分野で行われました。二〇二二年四月には憲法を改悪して二〇三六年までプーチンは大統領に居座ることが出来ます。そういえば、プーチンはKGBの元諜報員出身の大統領でした。

ひるがえって、日本でも「戦争する国づくり」を目指す歴史修正主義が、「歴史戦」の名のもとにマスコミ・教育を巻き込んで進められている。「いつか来た道」、そしてプーチンの道ではないでしょうか？ 「敵地攻撃能力」「歴史戦」「憲法改悪」の三点セットはプーチンの道です。

いま『歴史戦と思想戦』が多くの人に読まれることを願い、私も推薦します。

## 俳句

土田 裕

コロナ禍や春愁抱へ人籠もる  
群青の空得て梅の白さかな  
遠き日や園児言葉で涅槃説く  
青き踏む大地の鼓動感じつつ  
とびきりの朝日に目覚め山笑ふ

影山 武司

顔洗ふ水のやさしき今朝の春  
風光る遠嶺に青き響きあり  
流水の空の青さを閉ちこむる  
薄氷を手裏剣にして日に飛ばし  
初午やてんつくてんと猿回し  
亀鳴くや仏足石に日の温み  
雉鳴くや曲輪へ登る谷の径  
まどろみに夢の浮橋雛の夜  
大人びてお辞儀を交はず雛祭  
ウインドウ姿見にして春シヨール

## 編集後記

SK生

▼2月24日、ロシアのウクライナ侵攻が始まった。文字通りの侵略戦争である。世界中の人々が驚きと悲しみでこのニュースを聞いたことだろう。▼ウクライナを舞台にしたイタリア映画「ひまわり」では見る人を圧倒するばかりのヒマワリ畑が画面一杯に映し出される。美しいヒマワリがウクライナの大地にどこまでも咲き誇っている。美しい国だ。▼そのウクライナの中年女性が銃を持つロシアの兵士に詰め寄る。「何をしに来たの？ ここは私たちの国よ。さあこのヒマワリの種を持って行きなさい。ポケットに入れて貴方たちはそこで死に、その死体の上にはヒマワリが咲くでしょう。ほら、ポケットに入れなさい」悲しい言葉である。プーチンの狂気の判断がなければこの女性はこんな言葉を言うこともなかった。あの輝くばかりのヒマワリが血まみれの死体とともに語られるとは。▼世界中で、いや敵しい弾圧を受けるロシアでも戦争反対の声はわき起こっている。私たちの身近でもサイレントスタンディングが行われている。「ウクライナに平和を。戦争反対」というプラカードを高く掲げて。これを嘲笑する人もいる。「そんなことはクソの役にも立たぬ」と。しかし、こうした民衆の声が徐々に積み上がって近代史を推し進めてきた。これを否定し恐怖するのは専制主義的な為政者だけである。▼沸き起こる民衆の声を切り捨て「クソの役にも立たぬ」と冷笑する態度がコロナ禍で苦しむ民衆、貧困に苦しむ多くの民衆を我が国でも生み出したのではなかったのか、といえは言い過ぎか。



人生としての川柳 (続々の続)

今回は、現代川柳の礎を築いた六大家と呼ばれる人たちの最後の二人、麻生路郎(じろう)と岸本水府(すいふ)について述べる。

(5) 麻生路郎は一八八八年(明治二十一年)生まれ。通信省外電技師や堺市立公民病院事務長などの職に恵まれながら放棄し、妻子を貧窮にさらし、家族に川柳と手を切ることを誓わせられながら、川柳を捨てなかつた。三十六歳のときに『川柳雑誌』を創刊、四十八歳で「専門家のなき世界は発展せず」と川柳人初の「川柳職業人宣言」を發した。四男五女の父になつたが暮らし向きも行く末も問わず、「思い込んだら命がけ」の情熱で川柳の発展に邁進した。

「私は川柳を人間陶冶の詩であるといっている。人間へ締め木をあてて絞ると、いろんな悪汁が流れ出て、そのあとには朗らかな脱俗した人間が残るのではないかと思う。その締め木の役を川柳が果たしてくれているように思えてならない」

「人間陶冶の詩」は路郎の人格を律し、句において品格のある山脈を築いた。門人への指針は「一句を残せ」「いのちある句を創れ」で、低俗に陥ることをいしめた。路郎の句。

逢いたかつた逢いたかつたと裾を  
ふみ

二階を降りてどこへ行く身ぞ  
君見たまえ蒨草(ほうれん草)が  
伸びてゐる

子を死なし学校に子の多いこと  
人類は悲しからずや左派と右派  
人生を暗いところで探りあて

一九六五年、七十七歳で死去、辞世の句。

雲の峯という手もあり  
さらばさらばです

(6) 岸本水府―存命中、大阪人で水府の名前を知らない者はいないほど市民に浸透し愛された川柳家である。

「文学か娯楽か―今、重大な岐路に立っている川柳です。慰みもの、との誤解を避けるためには、おそまきながら、川柳界の風習、制度から、時代おくれの遊びの色を悉く拭い去る努力をしなければなりません」と、一九五四年(昭和二十九年)、番傘川柳本社の句会席上「川柳第四運動」を訴えた。

第一運動とは、大正から昭和初期の芸術至上主義や社会主義リアリズムに傾いた新興川柳運動。第二は、古川柳の江戸趣味を見失うまいとする運動、第三は草詩や寸句という名称が考えられたが結局川柳に落ち着いた名称改革運動である。そして第四運動について、先に記した言葉に続けて「清潔な文学の中に正しい歩みをつづけ

るよう努力したいと思うのです」と述べている。こう述べたあと水府は、さらに以下のようなことを紹介している。

その一つは、水府が路郎とともに大阪府文化賞を七年前に受けたとき、「新大阪新聞」が社説で「今度の表彰は間違っている。この中に雑俳家が入っている。大阪の文化面で何を苦しんで雑俳家を入れたか」と書いたこと。

もう一つは、直木賞に名を残す作家直木三十五(さんじゅうご)の川柳蔑視観で、「川柳の如きもので自分の精神生活が、完全に表現されるなら、その人間は軽蔑してもいい」というもの。そして次のように話を結んだと、田辺聖子はその大著『道頓堀の雨に別れて以来なり』に綴る。

「私たちは今こそ協力して川柳の文学運動に集中しなければなりません。岡本一平さんはポンチ絵と蔑まれていた漫画を、士大夫の賞玩するものにまで昇められ、川柳界も同じようにと激励されました。それには団結の力が必要であると。川柳家全体、打って一丸となつて社会に進出せよと。味わうべき言葉とあります。皆さんとともに大いなる希望をもつて柳界の発展のために努力したいと思ひます」

「拍手は鳴りやまず、水府は眼鏡が曇つた」という。水府の川柳に対する旗印は、若い頃に掲げた「本格川柳」であった。川柳

に品位を求め、文学性を高めようとした水府の句を見てみよう。

涙ぐんだ時に箒の手がとまり  
頬かむりの中に日本一の顔  
大阪に住むうれしさの絵看板  
友達の医者は飲んでもよいといふ  
ぬぎすててうちが一番よいといふ  
受付と自分で書いて自分ゐる  
恋せよと薄桃色の花が咲く  
一葉のはたちの筆に愧死すべし

水府は一八九二年(明治二十五年)三重県に生まれ、幼くして大阪へ。一九一三年(大正二年)に五人で『番傘』を創刊し発行兼編集人となる。二十一歳であった。グリコや福助足袋のコピライターも務めた。一九六五年(昭和四〇年)、七十三歳で死去、四天王寺での告別式は千余名の会葬者を数えたという。

川柳や俳句の会は、高齢化の中で存続が危ぶまれていたが、それに輪をかけたのが二年を超えるコロナ禍であった。しかし、「魂は表現されなければ、それが存在するのかわるか、当人にさえもはっきりしない」という加藤周一の言葉が真実である限り、人間を表現するものとしての川柳や俳句がなくなることはないであろう。意志さえあれば、会(組織)の存続の方法は、いくらかもあるからである。